新発田市五十公野天辻川バイカモについて

石沢　進

新発田市のバイカモの生育地は、県内でも分布の最北であることから、その生育地の保存は重要と思い、北陸農政局信濃川宛に2009年4月9日付けで次のようなお願いの文書を提出した。

> 2009. 4. 9
>
> 新発田市八幡付近の
> バイカモ生育地の保存のお願い
>
> 近く新発田市八幡付近で水田の基盤整備が行われると情報を聞きました。
> この付近の水路にバイカモという新潟県絶滅危惧種が生育しています。県内では最も北に分布するところであり、その保存が望まれます。基盤整備の際に絶滅しないような配慮をお願い申し上げます。
>
> 新潟市秋葉区東町秋葉区地域学園
> 植物資料室（積雪地域植物研究所）
> 石沢　進
> (tel 0250-22-9686)

その結果、植物資料室に北陸農政局や新潟県新発田地域振興局の職員が訪問され、保護の可能性について検討するとの意向を頂いた。

その後、6月24日に現地調査の依頼の連絡を受けて新潟県新発田地域振興局の職員、地元五十公野土地改良区の関係者、地元の佐藤豊雄氏などと共に会合を持ち、整備の計画などの説明を受けた。引き続いて天辻川沿いのバイカモの生育地を見てまわった。バイカモはすでに整備の終わった水路沿いにも生育している状況を観察した。気温が上昇した関係からか流水に漂うバイカモの緑が鮮明ではなく、黒味かかっていたが、確かに整備された水路にも生育していることを確認した（写真1・2）。

私が当初生育地の保存をお願いした場所は、まだ区画整備が行われていない天辻川上流部で生育地の上限にあたる地域に当たる（写真3・4）。下流部に生育しているのは、この上流部のバイカモからの種子供給によるものと推定される。この流域のバイカモを保護するためには，この最上流部の生育の温存が極めて重要であると考えられる。従ってこの生育地をできるだけ破壊しないで工事を進めることが肝要であろう。

最上流部の生育地は、多雨時にすぐ増水して水路沿いの水田に溢れて、冠水するとのことで、水路を改変して流れをよくすることが大きな目的となっており、これまでの計画では水路の移動や改変が進められる計画になっているという。しかしながら、バイカモの生育地として維持することが、生物多様性の観点から切望されるところである。

現場でも水路改変のより良い方策がないか、との議論や提案もあったが、結論を得るに至らなかった。

> バイカモの保護に当たっての要件には、次の点に配慮する必要がある。
> ・生育地の破壊を最小限に留める
> ・湧水の水脈を守る
> ・水田の冠水を回避する

上記の要件を満たすための方策としては、現状を残して水田の冠水を避けることが望まれる。そのためには、水路の幅を広く取り、水路の両側を嵩上げして増水時の冠水を防ぐ手立てが必要であろう。いずれにしても現況の水路を改変することを避けなければならない。

近年、農林省でも農地の改変にあたり、生物の多様性に配慮する必要性を認識して事前に現状把握を行うようになってきており望ましい方向に成ってきている。上記のバイカモの保全は、配慮の対象として取り上げて保護する必要箇所に該当する。国の方針にしたがって、天辻川のバイカモ保存に理解を願いたい。

> バイカモは、新潟県レッドデータブック（RDB）
> 絶滅危惧種　Ⅱ類

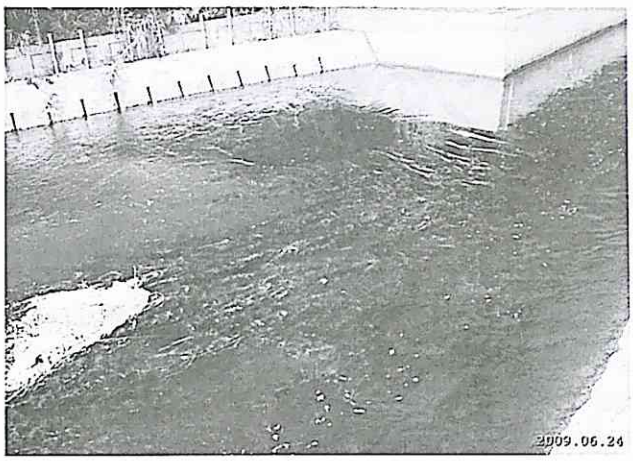

写真１　大辻川下流（区画整備後）におけるバイカモの生育

写真２　大辻川下流（区画整備後）におけるバイカモの生育

写真３　大辻川上流（区画整備前）におけるバイカモの生育（区画整備の対象地の生育状況）

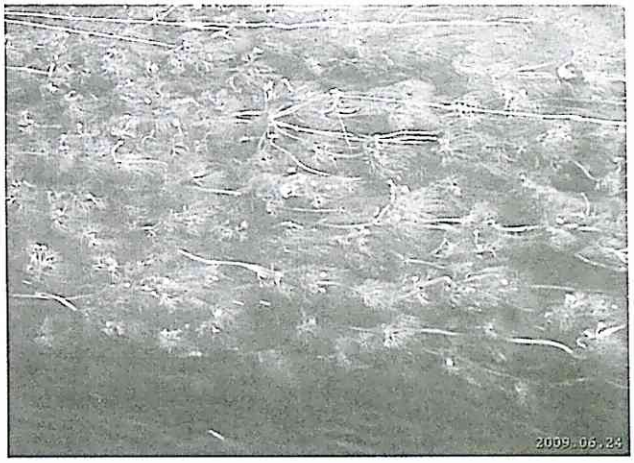

写真４　大辻川上流（区画整備前）におけるバイカモの生育（区画整備の対象地の生育状況）

朝日新聞　2009年(平成21年)7月26日　日曜日

天声人語

ドクダミは名前の響きで損をしている、と梅雨入り前の小欄に書いたら、名の由来などについていくつかの便りをいただいた。拝読すると、あの小さな白十字の花は意外にファンが多いようである▼思えば「雑草」とひとくくりにされる草の花には、素朴で可憐なものが結構ある。そして「雑草という草はない」と言われるように、どの一本も名前を持つ。ドクダミなど序の口の酷な名もある。夏に茂るヘクソカズラはその筆頭だろう▼漢字で書けば「屁糞蔓」。葉をむしると悪臭がするからだが、白くて内側が赤い花は愛らしい。オオイヌノフグリもかわいそうだ。青い花は楚々と澄まし顔なのに、実の形から「犬の股間の袋」と相なった。花の精がいるなら、人の無粋にご立腹かもしれない▼夏の暦は進んで、土のあるところ、様々な雑草の威勢がいい。借りているわが畑では、抜いてもすぐに伸びて作物を脅かす。かつて農家は「草に攻められる」と夏を呪ったそうだ。汗だくの苦労に多少なりとも思いがおよぶ▼だが、嫌われ者の雑草に温かい目を向けた人も多い。草々を「地に潜んでいる生命の眼」と呼んだのは明治生まれの文人、薄田泣菫だった。草に現れた命ほど、謙虚で、素朴で、辛抱強いものはないと親しみを寄せた▼〈つかの間に夏草胸を没しけり〉横光利一。繁茂することのみに徹し、伸び放題に丈をなした様がまぶたに浮かぶ。人が手塩にかけた花は美しい。されど夏。勝手に青い草々もまた、自然の生命力に満ちあふれた、美しい光景であるのに違いない。

<2009・7・26>